

『程氏家塾読書分年日程』 訳注 (五)

松野 敏之・中嶋 諒

本稿は、朱子学研究会の読書会で扱った程端礼『程氏家塾読書分年日程』の訳注を試みるもので、本誌第一号からの連載である。読書会の参加者は、以下の通りであり、本稿は担当者（氏名の上に「※」を表記）の草稿を元に作成している。

* 清水則夫（早稲田大学文学学術院講師）・北澤紘一（早稲田大学文学学術院講師）・* 宮下和太（早稲田大学助手）・* 阿部光麿（早稲田大学文学学術院講師）・* 大場一央（早稲田大学大学院博士後期課程）・小池直（早稲田大学大学院博士後期課程）・阿部亘（早稲田大学大学院博士後期課程）・* 原信太郎アレシヤンドレ（早稲田大学大学院修士課程修了）・上村新治（早稲田大学大学院修士課程）・田村有見恵（早稲田大学大学院修士課程）・佐々木仁美（早稲田大学大学院修士課程）・梶田祥嗣（早稲田大学大学院修士課程）・江波戸互（早稲田大学大学院修士課程）・* 中嶋諒（早稲田大学大学院博士後期課程）・* 松野敏之（早稲田大学大学院博士後期

課程)

【凡例】

- ・ 底本には常熟瞿氏鐵琴銅劍樓藏元刊本（四部叢刊所収）を用い、叢書集成本（清刊本・正誼堂全書本）・四庫全書本との校異を示した。但し、煩を避けるため、異体字・通仮字・同義語の類の異同は割愛した。
- ・ 解釈には、『程氏家塾読書分季日程』（昌平叢書所収）および姜漢椿校注『程氏家塾読書分年日程』（黄山書社出版、一九九二年四月）を参照した。
- ・ 訳注は、原文・校異・注釈・通釈の順で並ぶ。
- ・ 原文・訳文中の「」を附した部分は、底本では割注に相当する。
- ・ 注釈で引用した原文には「」を附して訓読を示した。但し、一読して明らかな場合には省略している。
- ・ 訳文中で（ ）を附した部分は、訳者の補注である。

【『程氏家塾読書分年日程』卷二（底本 卷二・一丁表〜卷二・十六丁表三行）】

程氏家塾[。]読書分年日程卷二

四書本經既明之後、自此日看史。仍五日內、專分二日、倍溫玩索四書經注或問、本經傳注、倍溫諸經正文。

夜間讀看玩索温看性理書、並如前法。〔爲學之法、自合接續明經。今以其學文、不可過遲。遂次讀史、次讀韓文、次讀離騷、次學作文、然後以序明諸經。覽者詳焉。〕

〔校異〕

a 程氏家塾：四庫全書本、此の四字無し。 b 卷二：叢書集成本、「卷之二」に作る。四庫全書本、「卷二」の下に「元〇程端禮〇撰」の七字有り。

〔注釈〕

(1) 韓文：韓愈の文章のこと。韓愈（七六八〜八二四）、字は退之。河北昌黎の人で、昌黎先生と称される。裝飾的な駢儷文に反対して、内容を重視する古文の復興を唱えた。著に『韓昌黎先生集』がある。

伝は『旧唐書』卷一六〇、『新唐書』卷一七六など。

(2) 離騷：屈原の作。『楚辞』に収められる。屈原（前三四三？〜前二八三？）、名は平、原は字。楚に仕える。讒言によって疎外され、失意のうちに汨羅に身を投じた。その憂患・愛国の心情を著した「離騷」等の作は、後世に大きな影響を与えた。伝は『史記』卷八四。

〔通釈〕

『程氏家塾讀書分年日程』卷二

四書・五経を明らかにして以降は、日々史書を読んでいくようにする。それでも引き続き五日間のうち九二日を割いて、四書の本文・注・或問と五経の本文・伝・注を暗誦・玩味し、諸経の本文を暗誦・復習する。夜間は性理の書を素読・玩味・復習する。これらはみな前述の方法の通りである。〔学問をおさめる方法は、

自然に繋げていつて經文（の意）を明らかにさせていくべきである。今この時期に文章を学ぶのは、遅くなり過ぎないようにすべきだからである。そこで順を追って史書を読み、韓愈の文章を読み、「離騷」を読み、そして作文を学び、それから順序立てて諸經書を明らかにしていく。見るものは、よくよく考えよ。」

看通鑑。

看通鑑、及參綱目。兩漢以上、參看史記漢書、唐、參唐書、范氏唐鑑。看取一卷或半卷、隨宜增減。「四書既明、胸中已有權度、自此何書不可看。」雖不必如讀經之遍數、亦須虚心反覆熟看。至於一事之始末、一人之姓名爵里諡號世系、皆當子細攷求彊記。又須分項詳看、如當時君臣心德之明暗、治道之得失、紀綱之修廢、制度之因革、國本之虛實、天命人心之離合、君子小人之進退、刑賞之當濫、國用之奢儉、稅斂之輕重、兵力之彊弱、外戚宦官之崇抑、民生之休戚、風俗之厚薄、外夷之叛服。如此等類、以項目寫貼眼前、以備逐項思玩當時之得失。如當日所讀項目無者、亦須通照前後思之。如我親立其朝、身任其事、每事以我得於四書者照之、思其得失、合如何論斷、合如何區處。有所得與合記者、用冊隨鈔。然後參諸儒論斷、管見、綱目凡例、尹氏發明、金仁山通鑑前編、胡庭芳古今通要之類、以驗學識之淺深。不可先看他人議論、如矮人看場無益。然亦不可先立主意、不虚心也。諸儒好議論、亦須記。仍看通鑑釋文、正其音讀。看畢、又通三五日前者看一遍。

一、分日倍溫玩索四書經注或問、本經傳注、及諸經正文。夜間讀看玩索溫看性理書、並如前法。

通鑑畢。

〔考異〕

a 須：叢書集成本・四庫全書本、此の字無し。 b 讀：叢書集成本、「讀書」に作る。

〔注釈〕

- (1) 綱目：朱熹『資治通鑑綱目』五十九卷。北宋司馬光『資治通鑑』二百九十四卷を省約した書。歴史記述の正確さよりも義理を重んじた。「綱(大要)」と「目(細目)」とを挙げるが、朱熹が著したのは「綱」のみで、「目」は門人の趙師淵らの手による。
- (2) 范氏唐鑑：北宋范祖禹『唐鑑』十二卷。唐の高祖から哀帝に至るまでの事跡を摘取して標題とし、それぞれに論断を加えた書。南宋呂祖謙が音注を施し、分けて二十四卷とした。范祖禹は既出、本誌一四号一〇頁参照。
- (3) 管見：南宋胡寅『讀史管見』三十卷。義父の北宋胡安国『春秋伝』に倣って、『資治通鑑』の評論を記した書。朱熹『資治通鑑綱目』は、この書の説を多く採用している。
- 胡寅(一〇九八―一一五六)、字は明仲など。福建崇安の人。著に『斐然集』、『論語詳説』の書がある。伝は『宋史』卷四三五、『宋元学案』卷四一など。
- (4) 綱目凡例：朱熹『資治通鑑綱目』の「凡例」のこと。『資治通鑑綱目』に附刻され、統系や歳年など一九の項目について、その凡例を示したもの。
- (5) 尹氏發明：南宋尹起莘『通鑑綱目發明』五十九卷。『資治通鑑綱目』の「凡例」を解説した書。

尹起莘、字は耕道、浙江遂昌の人。伝は『宋元学案補遺』卷四九。

(6) 金仁山通鑑前編：南宋金履祥『資治通鑑前編』十八卷・『筆要』三卷。『資治通鑑』以前の事績を扱った北宋劉恕『通鑑外記』十卷・『目錄』三卷に対して、經書を始めとする諸書の記述を典拠に、その失を矯めることを意図した書。しばしば『資治通鑑綱目』に附刻され、併せて「通鑑綱目」と称された。

金履祥は既出、本誌一五号六五頁参照。

(7) 胡庭芳古今通要：元胡一桂『十七史纂古今通要』十七卷。三皇より五代に至るまでの事跡を、『資治通鑑綱目』の体裁に基づいて論断した書。

胡一桂は既出、本誌一六号一三六頁参照。

(8) 矮人看場：「矮人看戲」に同じ。身長の低い者が高い者の後ろから観劇すること。前人の批評の声を聞いてから同様の批評をすることで、識見のない喩え。『朱子語類』卷一四〇・17条に、「今人只見魯直説好、便却説好、如矮人看戲耳」とある。

(9) 通鑑釈文：北宋史炤『通鑑釈文』三十卷、もしくは北宋司馬康『通鑑釈文』二十卷。『資治通鑑』の記載に語釈及び音注を附した書。ここではいずれの書を指すか詳らかでないが、どちらもその内容に大差はないといわれる。

史炤、字は子熙・見可、四川眉山の人。蘇軾・蘇轍兄弟が師事した。伝は『宋元学案補遺』卷九九。

司馬康（一〇五〇〜一〇九〇）、字は公休、山西夏県の人。司馬光の子。著に『孟子解』などの書がある。伝は『宋史』卷三三六、『宋元学案』卷八など。

〔通釈〕

『資治通鑑』を読む。

司馬光『資治通鑑』を読む際には、朱子『資治通鑑綱目』を参照する。前漢・後漢以前のことは『史記』、『漢書』を参照し、唐代のことは『唐書』と范祖禹『唐鑑』を参照する。一卷もしくは半巻ずつとりあげて読み、時宜を鑑みながら増減していく。「すでに四書が明らかで胸中に基準があるので、これ以降どんな書でも読むことができよう。」必ずしも経書を読むときほどの回数はいないが、虚心に反復熟読する必要がある。ある一事件の顛末や、ある一人物の姓名・爵里・諡号・世系については、全て子細に考求して記憶しなければならない。また当時の君臣の心徳の明暗や治道の得失、綱紀の興廢、制度の沿革、国家基底の虚実、天命・人心の離合、君子・小人の出处進退、刑賞の適不適、国家財政の浪費・倏約、租税の軽重、兵力の強弱、外戚・宦官の重用・抑制、民衆の喜憂、風俗の厚薄、外夷の叛乱・服属については、項目に分けて詳しく読んでいくのがよい。これらは、項目ごとに書き出して眼前に貼り、当時の得失を思慮玩味するための準備としておく。当日（読んだ箇所）にとりあげる項目が無い場合は、前後を参照して思慮するとよい。

自分自身がその朝廷に立ち、身をもってその事を担当するかのように、事ごとに自分が四書から学び得たところに照らしてみ、その得失を思慮し、どう論断すべきか、どう処置すべきかを考える。理解したところや記憶すべきところは、冊子に随時書き写す。それから諸儒の論断や胡寅『読史管見』、朱子「資治通鑑綱目凡例」、尹起莘^{いんきしん}『通鑑綱目發明』、金履祥『資治通鑑前編』、胡一桂『十七史纂古今通

要』などを参照して、学識の深淺をためす。他人の議論を先に読むべきではない。背の低い者が高い者の後ろについて観劇するかのように他者に付和雷同して批評しても無益である。しかし先に自己の見解を立てて、虚心でなくなってしまうものもいけない。諸儒の秀れた議論も、記憶すべきである。また『通鑑釈文』を読み、その首韻を正す。読み終われば、三、五日前のところから通してもう一度読み直す。一、日程を配分して、四書の本文・注・或問、五經の本文・伝・注、及び諸經書の本文を暗誦・復習・玩味する。夜間は性理の書を素読・玩味・復習する。これらはみな前述の方法の通りである。

『資治通鑑』は以上である。

次讀韓文。

讀韓文。「文法、原於孟子經史、但韓文成幅尺間架耳。」先鈔讀西山文章正宗⁽¹⁾內韓文議論叙事兩體華實兼者七十餘篇。要認此兩體分明、後最得力。正以朱子考異、表以所廣謝疊山批點⁽²⁾。「篇法、章法、句法、字法、備見。」日熟讀一篇、或兩篇。亦須百遍成誦、緣一生靠此爲作文骨子故也。既讀之後、須反覆詳看。每篇先看主意以識一篇之綱領。次看其叙述、抑揚輕重、運意轉換演證開闔關鍵、首腹結末、詳略淺深次序。既於大段中看篇法、又於大段中分小段看章法、又於章法中看句法、句中看字法、則作者之心不能逃矣。譬之於樹。通看則由根至表、幹生枝、枝生華葉、大小次第相生而爲樹。又折一幹一枝看、則又皆各自有枝幹華葉、猶一樹然、未嘗毫髮雜亂、此可以識文法矣。看他文皆當如此看、久之自會得法。

今日學文能如此看、則他日作文能如此作、亦自能如此改矣。然又當知有法而無法、無法而有法。有法者、篇篇皆有法也。無法者、篇篇法各不同也。所以然者、如化工賦物、皆自然而然、非區區模擬所致。有意於爲文、已落第二義。在我經史熟、析理精、有學有識有才、又能集義以養氣。是皆有以爲文章之根本矣。不作則已、作則沛然矣。第以欲求其言語之工、不得不如此讀看耳。非曰止步驟此而能作文也。果能如此工程讀書、將見突過退之、何止肩之而已。且如朱子或問及集中文字、皆是用歐曾法。試看歐曾、曾有朱子議論否。此非妄言。若能如此讀書、則是學天下第一等學、作天下第一等文、爲天下第一等人。在我而已、未易與俗子言也。自此、看他文、欲識文體有許多樣耳。此至末事、一看足矣、不必讀也。其學作文次第詳見于后。

一、六日內、分三日倍溫玩索四書經注或問、本經傳注、諸經正文、及溫看史、夜間讀看玩索溫看性理書、如前法。

韓文畢。

〔校異〕

a 日：四庫全書本、「自」に作る。 b 由：叢書集成本・四庫全書本、「繇」に作る。 c 之：叢書集成本、「隨」に作る。 d 若：叢書集成本、「者」に作る。

〔注釈〕

(1) 西山文章正宗…傳本真德秀『文章正宗』二十卷・統篇二十卷。『文章正宗』は、歴代の文章を辞令・議論・叙事・詩歌の四類に分け、これらに対して真德秀自身が注解を施した書。正編は唐代以前の文、統

編は北宋の文を収録する。なお続篇は議論・叙事の二類を収めるのみである。

真徳秀は既出、本誌第一三号一四一頁参照。

(2) 朱子考異・朱熹『昌黎先生集考異』十巻のこと。

(3) 所広謝疊山批点（南宋）・謝枋得（南宋）『文章軌範』に収める韓愈の文章に附された批点のことで、ここではさらに程端礼が整理・補足したものを指す。底本の頭注には「端礼有広疊山批点法、及韓文叙事議論批点成書二冊」とあり、程端礼に『広疊山批点法』と『韓文叙事議論批点』の著書があったことが示されている。また底本巻二・二十七丁には、程端礼の「批点韓文凡例〔広疊山法〕」を掲載する。

謝枋得（一二二六〜一二八九）、字は君直、江西弋楊（南宋）の人。疊山先生と称される。漢代より宋代に至るまでの文章を、字句・文法にこだわらずに表現した放胆文と、細心の注意を払って表現した小心文とに分け、それぞれに批注・圈点を附して『文章軌範』を著した。伝は『宋史』巻四二五、『宋元学案』巻八五など。

(4) 欧曾（北宋）・欧陽脩（北宋）と曾鞏（北宋）を指す。

欧陽脩（一〇〇七〜一〇七二）、字は永叔、江西廬陵の人。諡は文忠。文は唐の韓愈・柳宗元以後の第一人者といわれ、その門からは蘇洵・蘇軾・蘇轍・曾鞏・王安石などが出た。著に『易童子問』、『毛詩本義』、『新唐書』、『新五代史』、『帰田録』、『欧陽文忠公全集』など多数ある。伝は『宋史』巻三一九、『宋元学案』巻四など。

曾鞏（一〇一九〜一〇八三）、字は子固、江西南豊の人。南豊先生と称される。著に『元豊類稿』の

書がある。伝は『宋史』卷三一九、『宋元学案』卷四など。

〔通釈〕

次は、韓愈の文章を読む。

韓愈の文章を読む。「文法は『孟子』や経書・史書に基づくが、韓愈の文章は適切な基準と結構をもたらし、たらずために学ぶのである。」

まず真徳秀『文章正宗』に収める韓愈の議論体・叙事体の文章の華麗さと質朴さを兼備したものの七十余篇を書き写して読む。この議論体・叙事体の二者をはっきりと理解してこそ最も力になる。朱子『昌黎先生集考異』で異同を正し、謝枋得『文章軌範』に附された批評や訓点〔篇法・章法・句法・字法が詳細に示されている〕を附す。日に一、二篇を熟読する。必ず百回は暗誦すべきであるが、それは一生涯これによつて文章を作る土台とするからである。

読んだ後は反覆して子細に読むのがよい。篇ごとにまずその主意を読みとり、その一篇の綱領を理解し、次にその叙述の抑揚・軽重、運意・転換・演繹証明・結構の変化や結構そのもの、冒頭・中腹・結末、詳略・深淺・次序を読みとる。大段において篇法を読みとつたら、大段を小段に分けて章法を読みとる。また章法の中に句法を読みとり、句法の中に字法を読みとる。このようであれば作者の心意を逃すことはない。これを樹木に譬えてみよう。大きくみるならば、根元から表面まで、幹が枝を生じ、枝が花や葉を生じるように、大小が順序だつて生じていってこそ樹木である。けれども一本の幹や枝を手折つてみるならば、その（手折つたものにも）それぞれ枝・幹・花・葉があり、あたかも一本の樹木の

ようで、そこには僅かな乱れもない。この喩えから文法というものを知ることができよう。他の文章を読むにも、全てこのように読んでいくべきなのであり、このようであればいずれおのずとその法則が分かるだろう。いま文章を学ぶのに、このように読むことができれば、後日文章を作ることともよくできるし、またおのずと改めていくこともできよう。

しかしまた、法則があるともなく、法則がなくともある、ということを知らなければならぬ。法則があるというのは、一篇一篇にはみな法則があるということである。法則がないというのは、一篇一篇の法則がそれぞれ同じでないということである。それは何故かといえば、造化の吟詠とは、自然とそうなるのであって、小手先の摸倣でなせることではないからである。文章を作るのに、ことさらに意を用いていては、もはや二義的などころに没してしまふ。自身の中で経書や史書（の理解）が成熟し、理の分析が精密になることや、学・識・才があること、また義理を集めて気を養っていくこと、これらは全て文章の根本となるのである。文章を作らないならばそれまでであるが、作ろうとすれば勢いよく出てくる。巧みな文章表現を求めめるためにも、このように読まざるを得ないのである。単に追隨して文章を作れるようになれというのではない。もしもこのカリキュラムのようによく読書したならば、韓愈に比肩するだけには留まらず、韓愈を超えるものとなるだろう。例えば、朱子の『或問』や『文集』の文章は、いずれも欧陽脩・曾鞏（そうきよう）の手法を用いている。だからといって欧陽脩・曾鞏の文章を読んだところで、朱子ほどの議論があるだろうか。これは妄言ではない。もしもこのようによく読書するならば、天下第一等の学問を学び、天下第一等の文章を作り、天下第一等の人物となるであろう。それは自分次第なの

であつて、俗人とは語り難いことである。これ以降、他の文章を読むのは、ただ文体が多様であることを知るためである。それは末事であり、一たび読めば事足りるのであつて、精読する必要はない。

作文を学ぶカリキュラムは、後文にて詳述する。

一、六日のうち三日を割いて、四書の本文・注・或問、五経の本文・伝・注、諸経書の本文を暗誦・復習・玩味し、史書を復習する。夜間に性理の書を素読・玩味・復習するのは、前述の方法の通りである。韓愈の文章は以上である。

次讀楚辭⁽¹⁾。

讀楚辭。正以朱子集注⁽²⁾、詳其音讀訓義。須令成誦、緣靠此作古賦骨子故也。自此他賦止看、不必讀也。其學賦次第、詳見於后。

一、分日倍温玩索四書經注或問、本經傳注、諸經正文、温看史、夜間讀看玩温性理書、如前法。性理畢、次攷制度。制度書多兼治道、有不可分者。詳見諸經注疏、諸史志書、通典⁽³⁾、續通典⁽⁴⁾、文獻通攷⁽⁵⁾、鄭夾漈通志略⁽⁶⁾、甄氏五經算術⁽⁷⁾、玉海⁽⁸⁾、山堂攷索⁽⁹⁾、尚書中星閏法詳說⁽¹⁰⁾、林勳本政書⁽¹¹⁾、朱子井田譜⁽¹²⁾、夏氏井田譜⁽¹³⁾、蘇氏地理指掌圖⁽¹⁴⁾、程氏禹貢圖⁽¹⁵⁾、鄒道元水經⁽¹⁶⁾、張主一地理淪革⁽¹⁷⁾、漢官攷⁽¹⁸⁾、職源⁽¹⁹⁾、陸農師禮書⁽²⁰⁾、禮圖⁽²¹⁾、陳祥道禮書⁽²²⁾、陳暘樂書⁽²³⁾、蔡氏律呂新書及辯證⁽²⁴⁾、律準⁽²⁵⁾、禮典⁽²⁶⁾、郊廟奉祀禮文⁽²⁷⁾、呂氏兩漢菁華⁽²⁸⁾、唐氏漢精義⁽²⁹⁾、唐精義⁽³⁰⁾、陳氏漢博議⁽³¹⁾、唐律注疏⁽³¹⁾、宋刑統⁽³²⁾、大元通制⁽³³⁾、成憲綱要⁽³⁴⁾、說文五音韻譜⁽³⁵⁾、字林⁽³⁶⁾、五經文字⁽³⁷⁾、九

經字樣、戴氏六書故、王氏正始音、陸氏音義、牟氏音攷、賈氏羣經音辨、丁度集韻、司馬公類篇、切韻指掌圖、吳氏詩補音及韻補、四聲等子、楊氏韻譜、先擇制度之大者、如律、曆、禮、樂、兵、刑、天文、地理、官職、賦役、郊祀、井田、學校、貢舉等分類、如山堂攷索所載歷代沿革、考覈本末得失之後、斷以朱子之意、及後世大儒論議。如朱子經濟文衡、呂成公制度詳說、每事類鈔、仍留餘紙、使可續添、又自爲之著論。此皆學者所當窮格之事。以夫子之聖、猶必問禮問樂、而後能知。豈可委之以爲名物度數之細而略之。平日誠能沉潛參伍以求其故、一旦在朝、庶免禮官不識禮、樂官不識樂之誚。而和胡阮李范馬劉楊不能相一之論可決、禘祫廟制可自我而定、如韓子朱子矣。豈特可做源流至論、及呂成公錢學士百段錦、作成策段、爲畢業資而已。

〔校異〕

a 水經：叢書集成成本・四庫全書本、「水經註」に作る。 b 論：叢書集成成本・四庫全書本、「沿」に作る。

c 故：叢書集成成本・四庫全書本、「考」に作る。 d 譜：叢書集成成本・四庫全書本、「補」に作る。

e 曆：叢書集成成本、「歷」に作る。清の乾隆帝（弘曆）の避諱。

〔注釈〕

(1) 楚辭：屈原「離騷」「九歌」「天問」などの作を中心として、その作風を継ぐ弟子の宋玉「九弁」「招魂」などの後人の作と共にまとめた書。

(2) 朱子集注：朱熹『楚辭集注』八巻のこと。別に『楚辭弁証』二巻、『楚辭後語』六巻が附刻される。

(3) 通典：杜佑『通典』二百巻。上代から唐の天寶年間（七四二〜七五六）に至るまでの制度を、食貨

・選挙などの八門に分けて収録した書。

杜佑（七三三〜八一二）、字は君卿、諡は安簡。陝西万年の人。他に『理道要訣』の著書がある。伝は『旧唐書』卷一四七、『新唐書』卷一六六など。

(4) 続通典：北宋宋白『続通典』二百卷。『通典』の後を受け、五代後周の末までの制度を論じた書。『直齋書録解題』卷五・典故類にその名が見えるが、今は伝わらない。

宋白（九三三〜一〇〇九）、字は太素・素臣、河北大名の人。著に『文安集』、『文苑英華』の書がある。伝は『宋史』卷四三九、『宋元学案補遺』卷六など。

(5) 文献通攷：元馬端臨『文献通考』三百四十八卷。『通典』の後を受け、南宋の寧宗（在位一一九四〜一二二四）までの制度を二十八門に分けて収録した書。

馬端臨（一二五四〜一三三三）、字は貴与、江西樂平の人。他に『大学集伝』の著書がある。伝は『宋元学案』卷八九など。

(6) 鄭夾漈通志略：南宋鄭樵『通志』二百巻中の卷二五から卷七六までの略を指す。略は正史の志に相当し、氏族・六書から災祥・昆虫草木に至るまでの二〇略を収める。

鄭樵（一一〇四〜一一六二）、字は漁仲、福建莆田の人。夾漈先生と称された。他に『礼経奥旨』、『爾雅注』、『六経奥論』などの著書がある。

(7) 甄氏五経算術：北宋甄鸞『五経算術』二巻。経書における天文曆数に関する記述を列举して、それに対する自身の見解を附した書。

甄鸞の詳しい事績は分からないが、『五経算術』を著した他、後漢徐岳『数術記遺』、北魏張邱建『算經』など、多くの術数の書に注釈を施している。

(8) 玉海：南宋王应麟『玉海』二百卷。もと詞科のために作られ、經史子集から諸家の伝記に至るまで、二十一門・二百四十余類を収めた類書。別に「辞学指南」四卷を附している。

王应麟（一二三三—一二九六）、字は伯厚、浙江慶元の人。著に『困学紀聞』の書など多数ある。伝は『宋史』卷四三八、『宋元学案』卷八五など。

(9) 山堂攷索：南宋章如愚『山堂考索』前集六十六卷・後集六十五卷・続集五十六卷・別集二十五卷。經史子の諸書を網羅して、その考証にも優れた類書。ただし、四集の中では重複や齟齬が多く見られる。

章如愚、字は俊卿、浙江金華の人。山堂先生と称される。伝は『宋元学案補遺』卷七九。

(10) 尚書中星閏法詳説：未詳。

(11) 林勳本政書：南宋林勳「本政書」十三篇。宋王朝の兵農の弊害を論じ、古の井田の制に倣うことを薦めた上書。

林勳、広西賀州の人。「本政書」十三篇・「比較書」二篇を奉献したことで知られる。これらは佚して伝わらないが、その大略は『建炎以来繫年要録』卷二六などに見え、また『宋史』本伝にも採録される。伝は『宋史』卷四二二など。

(12) 朱子井田譜：朱熹「井田類説」のこと。漢の文帝が田租を廃止したのに対して、古の井田の法を引きつつ反対した後漢荀悦『漢紀』卷八・孝文二からの引用を録した。『朱文公文集』卷六八に収める。

(13) 夏氏井田譜：南宋夏休『周礼井田譜』二十卷。井田制について、図を交えて詳述した書。

夏休、浙江会稽の人。詳しい事績は分からないが、その著『周礼井田譜』には、永嘉学派の有力者である南宋陳傅良が序を附している。

(14) 蘇氏地理指掌図：北宋税安礼『地理指掌図』一卷。古代より宋代に至るまでの歴史地図四十四枚、及びその前後に序と総論を掲載した書。「蘇氏」とあるのは、旧題が誤って「蘇軾撰」としていたことによる。

税安礼、四川の人。『地理指掌図』の他に、『春秋列国図説』の著書がある。

(15) 程氏禹貢図：南宋程大昌『禹貢山川地理図』二卷。『尚書』禹貢の「九州」について、先人の旧説絵図を踏まえて弁正を加え、別に三十一図を載せた書。別に『禹貢論』五卷、『禹貢後論』一卷がある。

程大昌（一一二二—一一九五）、字は泰元、安徽休寧の人。地理の学に通じ、『雍録』、『北辺略対』を著した。他に『易原』八卷、『考古論』十巻など多数の著書がある。伝は『宋史』卷四三三、『宋元学案補遺』卷二など。

(16) 酈道元水経：北朝酈道元『水経注』四十巻。河川の流路を記した『水経』に、酈道元の注釈を加えた書。注の部分膨大で、また佚書を多く引くことから、かえって本文よりも尊ばれる。

酈道元（？—五二七）、字は善長、河北范陽の人。伝は『魏書』卷八九、『北史』卷二七。

(17) 張主一地理論革：南宋張洽『歴代地理沿革表』二十七巻・目錄二巻。『宋史』張洽伝などにその名が見えるのみで、その内容は詳らかではないが、歴代地理の変遷を論じた書と推測される。

張洽（一一六一—一二三七）、字は元德、主一は号。江西清江の人。朱熹に從学し、『朱子語録』の記録者の一人でもある。著に『春秋集伝』、『春秋集注』の書がある。伝は『宋史』卷四三〇、『宋元学案』卷六九など。

(18) 漢官攷：南宋徐筠『漢官考』四卷（あるいは六卷）。『漢書』百官公卿表を主としながら、本紀・列伝や諸家の注を取り、前漢の品秩・爵列・位号・名数について論じた書。

徐筠、字は孟堅、江西清江の人。著に『周礼微言』、『姓氏源流考』、『修水志』の書がある。伝は『宋元学案』卷五三など。

(19) 職源：南宋王益之『職源』五十卷。歴代の置官の本末について、官の故実・職の典掌・前賢の遺跡・先朝の訓詞の順に論じた書。

王益之、字は行甫、浙江金華の人。著に『西漢年紀』、『漢官総録』などの書がある。

(20) 陸農師礼書：おそらく北宋陸佃『礼記解』四十卷を指す。

陸佃（一〇四二—一一〇二）、字は農師、浙江山陰の人。王安石に経を学んだが、その新法には賛成しなかった。伝は『宋史』卷三四三、『宋元学案』卷九八など。著に『春秋後伝』、『爾雅新義』、『埤雅』、『陶山集』などの書がある。礼に関する書としては、『宋史』芸文志に「陸佃礼記解四十卷、又礼象十五卷、述礼新説四卷、儀礼義十七卷」と見える。

(21) 礼図：おそらく北宋陸佃『礼象』十五卷を指す。秘蔵の遺物に基づき、旧図の誤りを改めた書。

(22) 陳祥道礼書：北宋陳祥道『礼書』一百五十卷。絵図を交えた詳細な考証をもって、唐代諸儒の論や北宋聶

崇義『三礼図』の誤りを改めた書。

陳祥道、字は用之・祐之、福建福州の人。著に『註解儀礼』、『礼例詳解』などの書がある。伝は『宋史』卷四三二、『宋元学案』卷九八など。

(23) 陳陽樂書：北宋陳陽『樂書』二百卷。雅・俗・音器・歌舞から優伶・雜戲に至るまで、樂に関する事柄を広く収めた書。

陳陽、字は晋之、福建福州の人。著に『礼記解義』、『北郊祀典』の書がある。前注(22)であげた陳祥道の弟。伝は『宋史』卷四三二、『宋元学案』卷九八など。

(24) 蔡氏律呂新書及弁証：南宋蔡元定『律呂新書』二卷。音調の規準を示す竹管である律呂について論じた樂律研究の書。「律呂本原」「律呂証弁」の二卷からなる。「弁証」とあるのは「律呂証弁」のことである。朱熹によつて評価されるが、考証を欠き誤りは多い。

蔡元定(一一三五—一一九八)、字は季通、福建建陽の人。その子蔡沈とともに朱熹と親交が厚い。著に『皇極經世指要』、『癸微論』の書がある。伝は『宋史』卷四三四、『宋元学案』卷六二など。

(25) 律準：未詳。

(26) 禮典：未詳。姜漢椿氏は、北宋陳陽『北郊祀典』のことと推測するが、確証を欠く。

(27) 郊廟奉祀礼文：北宋楊完『元豊郊廟奉祀礼文』三十卷(あるいは二十卷)。歴代の郊廟(天地の祀と祖先の祭)の沿革を挙げて、その得失を論じた書。北宋陳襄らもその編纂に関与し、『宋史』芸文志では陳襄の著とするが、『直齋書録解題』卷六・礼注類などでは、最終的な撰者は楊完であることを記す。

楊完の詳しい事績は分らないが、『宋史』の記載等から元豐元年（一〇七八）に太常博士であったことが確認できる。

(28) 呂氏兩漢菁華^{南宋}：呂祖謙『西漢精華』十四卷、『東漢精華』十四卷。それぞれ前漢・後漢の歴史について、断片的に抜書きした書。呂祖謙は既出、本誌第一六号一三五頁参照。

(29) 唐氏漢精義唐精義^{南宋}：唐仲友『兩漢精義』、『唐書精義』。^{南宋}王心麟『玉海』卷四九・「淳熙漢規」にその名が見える。また『宋史』芸文志には、唐仲友の著として『唐史義』十五卷、『統唐史精義』十卷が挙げられる。

唐仲友（一一三六～一一八八）、字は与政、浙江金華の人。朱熹に弾劾されたことで知られる。著に『六経解』、『読史精義』、『帝王経世図譜』など多数の書がある。伝は『宋元学案』卷六〇など。

(30) 陳氏漢博議^{南宋}：陳季雅『兩漢博議』二十卷。その内容は詳らかでないが、『文献通考』卷二〇〇・経籍考に「博議、陳季雅撰。閔涉尤大」とあり、漢代の事績について広く評議を加えたものと推測し得る。

陳季雅（一一四七～一一九一）、字は彦群、浙江永嘉の人。伝は^{南宋}葉適「陳彦群墓誌銘」（『水心文集』卷一四所収）に詳しい。

(31) 唐律注疏^{南宋}：未詳。ここでは姜漢椿氏にしたがい、^唐長孫無忌『唐律疏義』三十卷と解釈した。『唐律疏義』は、唐代の法律について、名例・衛禁などの十二篇に分けて細説した書。

(32) 宋刑統^{北宋}：^{北宋}寶儀『宋刑統』三十卷。^{北宋}范質『大周刑統』二十一卷の条目が繁雑であったため、それを継承しつつ改訂増補し、宋初の刑法を分類統述した書。

寶儀（九一四く九六六）、字は可象、河北漁陽の人。伝は『宋史』卷二六三など。

(33) 大元通制：『大元通制』八十八卷。元王朝建国以来の法令制度について、制誥・条格・断例・別類に分類、至治三年（一二三三）に頒行された書。現存するのは二十二卷、条格の一部のみ。

なお、宮紀子「対策」の対策—大元ウルス治下における科挙と出版（『古典学の現在』V、二〇〇三年一月／『モンゴル時代の出版文化』、名古屋大学出版会、二〇〇六年一月、四四三頁）は、『大元通制』が「広くモンゴル諸制度についてカヴァーし、またヴィジュアルな図解を含む政書であった」とを指摘し、「おそらく『大元通制』のほうが『元典章』より流通し、権威ももった」であろうと推察している。

(34) 成憲綱要：元代の政書。宮氏は、『成憲綱要』は、現在散逸してしまっているが、『永楽大典』卷一四六八く九五までを占める、六部分類の政書であったこと、卷一九四二五「駅站」に引用される聖旨条図の日付より、少なくとも『永楽大典』所収のテキストは、至治三年の十二月よりあとに成ったことがわかる（前掲書三八六頁／前注（33）参照）と指摘する。

(35) 説文五音韻譜：南宋李燾『説文解字五音韻譜』十卷。後漢許慎『説文解字』の五百四十部を二百六韻の順序に改め、検索の便とした書。

李燾（一一一五く一一八四）、字は仁甫、四川丹陵の人。『資治通鑑』に倣い、北宋一代の編年史『統資治通鑑長編』九百七十八巻を編纂した。伝は『宋史』卷三八八、『宋元学案』卷八など。

(36) 字林：晋呂忱『字林』七巻。既出、本誌第一五号五九頁参照。

(37) 五經文字…唐張參『五經文字』三卷。三千二百三十五字を偏旁によつて百六十部に分類し、諸經の文字を正した書。

張參の詳しい事績は分からないが、『五經文字』の自序から、代宗（在位七六二〜七七九）の頃の人であつたことが確認できる。

(38) 九經字樣…唐唐元度『九經字樣』一卷。石經の字体を覈定した書。しばしば『五經文字』の後ろに附刻された。

唐元度の詳しい事績は分からないが、『九經字樣』を著した他、文宗（在位八二六〜八四〇）の勅により「開成石經」を立てたことで知られる。

(39) 戴氏六書故…南宋戴侗『六書故』三十三卷。伝統的な六書（指事・象形・形声・會意・轉注・假借）をもつて字義を明らかにするも、数・天文・地理・人・動物・植物・工事・雜・疑の九部に分け、従来の後漢許慎『說文解字』や南朝梁顧野王『玉篇』に代わる新説を提唱した字書。

戴侗（一一二〇〇〜一二八四）、字は仲達、浙江永嘉の人。他に『易書四書家說』の著書がある。伝は『宋元学案補遺』卷七〇。

(40) 王氏正始音…南宋王柏『正始之音』。既出、本誌第一五号五三頁参照。

(41) 陸氏音義…清陸德明『經典釋文』三十卷。既出、本誌第一六号一二五頁参照。

(42) 牟氏音攷…元牟昞龍『五經音攷』。既出、本誌第一六号一二五頁参照。

(43) 賈氏群經音弁…北宋賈昌朝『群經音弁』七卷。既出、本誌第一六号一二五頁参照。

(44) 丁度集韻：北宋丁度『集韻』十卷。平声四卷、上声・去声・入声各二卷、計五万三千五百二十五字を収める膨大な韻書。丁度の死後は、司馬光がその後を継いで編纂した。

丁度（九九〇〜一〇五三）、字は公雅、河南祥符の人。著に『遯英聖覽』、『龜鑑精義』、『編年総録』、『武経総要』の書がある。伝は『宋史』卷二九二など。

(45) 司馬公類篇：『類篇』十五卷。五百四十四部に分けて、字数三万一千三百十九、重字二万一千八百四十六、計五万三千六百六十五字を収めた字書。「司馬光撰」と題されるが、実際は北宋王洙や北宋胡宿らが修纂したもので、司馬光は奏進したのみである。

司馬光（一〇一九〜一〇八六）、字は君実、河南夏県の人。王安石の新法を批判するも、神宗（在位一〇六七〜一〇八五）即位後失脚し、河南洛陽に隠棲して『資治通鑑』二百九十四巻を著す。程頤に中央進出の機会を与え、また後の朱熹の評価も高く、道学との関係は深い。著に『易説』、『稽古録』、『書儀』、『家範』など多数の書がある。

(46) 切韻指掌図：『切韻指掌図』二卷。既出、本誌第一五号五九頁参照。

(47) 吳氏詩補音及韻補：南宋吳棫『毛詩補音』十卷、『韻補』五卷。『毛詩補音』は、『毛詩』の古韻語についてその一々を挙げた書。『毛詩叶韻補音』とも称される。『韻補』は、『尚書』から北宋蘇轍の文集に至るまでの五十種の書から、古韻語をとって注した書。

吳棫、字は才老、福建建安の人。「宋以来、古韻をいうものは吳棫に始まる」と言われ、朱熹の『詩集伝』、『楚辞集注』もこれを採っている。伝は『宋元学案』卷二二など。

(48) 四声等子：『四声等子』一卷。撰者は詳かでないが、南宋までには成立していた。等韻（韻図に拠つて三十六字母を韻書の韻目に配し、縦横に配列して字音を表示し、これを四等分したもの）について論じた書。

(49) 楊氏韻譜：楊俊『韻譜』三卷。詳細は不明。『千頃堂書目』卷三・小学類にその名が見える。

(50) 朱熹經濟文衡：『經濟文衡』前集二十五卷・後集二十五卷・續集二十五卷。朱熹の作とされるが誤り。あるいは朱熹門人の滕珙とうこうやその兄滕璘とうりん、また馬季機まききの作であるなどと諸説あるが、いずれも確証を欠く。まず縁起を明らかにし、次いで立論の意を示すという体裁を取り、前集・後集でそれぞれ学・古を論じ、続集で前後二集の欠を補った。

(51) 呂成公制度詳説：呂祖謙『歴代制度詳説』十五卷。科目・学校から宗室・祀事に至るまで、十五門に分けて、そのそれぞれについて、まず制度の概略を述べ、次いで明晰な詳説を附した書。

(52) 和胡阮李范馬劉楊：和峴わげん、胡瑗、阮逸、李照、范鎮、司馬光、劉幾、楊傑のこと。ここでの議論は、朱熹「律呂新書序」（『朱文公文集』卷七六所収）に「建隆皇祐元豐之間、蓋亦三致意焉。而和胡阮李范馬劉楊諸賢之議、終不能以相一也」（建隆・皇祐・元豐の間、蓋し亦た三たび意を致す。而るに和・胡・阮・李・范・馬・劉・楊の諸賢の議、終に以て相ひ一にする能はざるなり）とあるのを踏まえる。『朱子大全劄疑』は、これに注して「和峴、胡瑗、阮逸、李照、范鎮、司馬温公（司馬光）、劉幾、楊傑」とする。

(53) 源流至論：林駟りんけい、黄履翁『源流至論』前集十卷・後集十卷・続集十卷・別集十卷。林駟が前集

・後集・続集を、黄履翁が別集を著す。北宋の神宗が科挙において詩賦を廃止し、策論を用いるようになってから、策論の資とすべく編纂された書。經史百家の異同、歴代制度の沿革を編纂し系統立てた。

林駟、字は徳頌、福建寧徳の人。『源流至論』の他に、『皇鑑』前集・後集を著した。伝は『宋元学案補遺』卷二。

黄履翁、字は吉父、福建寧徳の人。伝は『宋元学案補遺』卷二。

(54) 呂成公錢學士百段錦：呂成公は、南宋呂祖謙。成は諡。その著『皇朝文鑑』卷一二四には、「策問」を収める。また宮氏前掲書四六六頁（前注（33）参照）には、『呂東萊策問』なる書があったことも指摘されている。

錢學士百段錦は、南宋錢諷『百段錦』のこと。いま佚して伝わらないが、科挙試験用の名文・答案を集めて系統別にまとめた書であったと推測される。

錢諷、字は正初、浙江錢塘の人。他に『史韻』の著書がある。

〔通釈〕

次は、『楚辞』を読む。

『楚辞』を読む。朱子『楚辞集注』で異同を正し、音韻・訓義を詳らかにする。必ず暗誦できるようにする。これによって古賦を作る土台とするためである。これ以降、他の賦はただ読むだけにとどめ、精読する必要はない。賦を学ぶカリキュラムは、後文にて詳述する。

一、日程を配分して、四書の本文・注・或問、五経の本文・伝・注、諸経書の本文を暗誦・復習・玩味

し、史書を復習する。夜間に性理書を素読・玩味・復習するのは、前述の方法の通りである。

性理書が終われば、次には制度を考察する。

制度の書の多くは、治道を兼ねており、両者を分けることはできない。諸経の注・疏や諸史の志・書、『通典』、『統通典』、『文獻通考』、鄭樵『通志』二十略、甄鸞『五經算術』、『玉海』、『山堂考索』、『尚書中星閏法詳説』、林勳「本政書」、朱子「井田類説」、夏休『周礼井田譜』、蘇軾『地理指掌図』、程大昌『禹貢山川地理図』、鄺道元『水經注』、張洽『歷代地理沿革表』、『漢官考』、『職源』、陸佃『礼記解』・『礼象』、陳祥道『礼書』、陳暘『樂書』、蔡元定『律呂新書』「律呂本原」・「律呂証弁」、『律準』、『禮典』、『元豊郊廟奉祀礼文』、呂祖謙『西漢精華』・『東漢精華』、唐仲友『兩漢精義』・『唐書精義』、陳季雅『兩漢博議』、『唐律疏義』、『宋刑統』、『大元通制』、『成憲綱要』、『說文解字五音韻譜』、『字林』、『五經文字』、『九經字樣』、戴侗『六書故』、王柏『正始之音』、陸德明『經典釈文』、牟昞龍『五經音攷』、賈昌朝『群經音弁』、丁度『集韻』、司馬光『類篇』、『切韻指掌図』、吳棫『毛詩補音』・『韻補』、『四声等子』、楊俊『韻譜』を子細に読む。律・曆・礼・樂・兵・刑・天文・地理・官職・賦役・郊祀・井田・學校・貢舉などの制度の大略をまず選び、『山堂考索』に記載する「歷代沿革」のように分類し、本末・得失を考察してから、朱子の意や後世の大儒の議論に基づいて判断する。朱子『經濟文衡』、呂祖謙『歷代制度詳説』といったものについては、事類ごとに書き写す。紙に余白が残ればそのままにしておいて、さらに付け加えるべきことがあれば、自ら論を著すようにする。これらはみな学ぶ者が究めなくてはならないことである。聖人の孔夫子であつても、必ず礼・樂について質問して理解したので

ある。これらを名物度数の瑣事とみなして捨て置き、いい加減に扱っていいわけがない。常日頃から眞摯に熟考してその淵源を探っておくならば、一たび朝廷に立つても、礼官となるも礼を知らず、楽官となるも楽を知らないという誹謗を免れ、和峴わげん、胡瑗、阮逸、李照、范鎮、司馬光、劉幾、楊傑の一致しない所論を調和して解決したり、祖先を合祀した禘祫ていこうの廟を自ら定めたりし得ること、韓愈・朱子の如きに達するであろう。単に林駟りんけい・黄履翁『源流至論』や呂祖謙『呂東萊策問』、錢謙『百段錦』を模倣し、答案を作成して科擧に資するだけに止まってはならない。

通鑑韓文楚辭既看既讀之後、約纔二十歳或二十一歳、仍以毎日早飯前循環倍温玩索四書經注或問、本經傳注、諸經正文、温看史、温讀韓文楚辭之外、以二三年之工專力學文。既有學識、又知文體、何文不可作。

〔校異〕 異同無し。

〔通釈〕

『資治通鑑』、韓愈の文章、『楚辭』を読み終わると、ようやく二十歳あるいは二十一、二歳ほどである。やはり毎日朝食前には、繰り返し四書の本文・注・或問、五經の本文・伝・注、諸經書の本文を暗誦・復習・玩味する。史書を復習し、韓愈の文章や『楚辭』を復習する他に、二、三年の工夫を集中して文章のことを学ぼう努める。学識が備わった上に、文体を知ったならば、どのような文章でも作ることができよう。

學作文。

學文之法、讀韓文法、已見前。既知篇章法章法句法字法之正體矣。然後更看全集〔有謝疊山批點¹〕、及選看歐陽公〔有陳同父選者²〕、曾南豐〔類藁³〕、王臨川三家文體、然後知展開開架之法。緣此三家、俱是步驟韓文、明暢平實、學之則文體純一、庶可望其成一家數文字。〔歐曾比韓、更開闔分明、運意縝密、易學而耐點檢、然其句法、則漸不若韓之古。朱子學之、句又長矣、眞西山雖亦主於明理、句法還短、不可不知。〕他如柳子厚文〔先看西山所選敘事議論、次看全集〕、蘇明允文、皆不可不看。其餘諸家之文、不須雜看。此是自韓學下來、漸要展開之法、看此要識文體之佳耳。其短於理處極多、亦可以爲理不明而不幸能文之戒。如欲敘事雄深雅健、可以當史筆之任、當直學史記、西漢書。先讀眞西山文章正宗、及湯東澗所選者、然後熟看班馬全史。此乃作紀載垂世之文、不可不學。後生學文、先能展開滂沛、後欲收斂簡古甚易。若一下便學簡古、後欲展開作大篇難矣。

〔校異〕

^a 點檢：叢書集成本、「點簡」に作る。四庫全書本、「尋玩」に作る。

〔注釈〕

(1) 謝疊山批点：『文章軌範』に引く韓愈の文章に附された謝枋得の批注・圈点をいう。既出、本稿二六五頁・注釈(3)参照。

(2) 陳同父選者：陳亮『歐陽文粹』二十卷。歐陽脩の文章のうち、百三十篇を選んでまとめた書。現行の『歐陽文忠公全集』と章句・字句の異同が多く、併せて参考すべきものである。

陳亮（一一四三〜一一九五）、字は同父（同甫）、龍川先生と称される。浙江永康の人。事功派・永康学派の中心人物で、朱熹の論敵としても有名。平生、「打倒金国・中原回復」を強調し、また好んで歴代人物の評論も行った。著に『春秋比事』、『龍川文集』などの書があり、他に『伊洛正源書』や『伊洛礼書補失』といった北宋道学に関する書も多い。伝は『宋史』卷四三六、『宋元学案』卷五六など。

(3) 類藁：^{北宋}曾鞏『元豊類稿』五十卷。曾鞏の詩文集。元豊（一〇七八〜一〇八五）年間に編じられたことから名付けられた。

(4) 王臨川：^{北宋}王安石（一〇二一〜一〇八六）、字は介甫、江西臨川の人。新法を主唱し、司馬光ら保守派と対立した。後の道学者による批判は激しいが、その詩文には定評がある。著に『周官新義』十六卷、『字説』二十卷、『臨川集』一百卷などの書がある。

(5) 柳子厚：^唐柳宗元（七七三〜八一九）、子厚は字。山西河東の人で、河東先生と称される。韓愈とともに古文復興を提唱し、しばしば「韓柳」と並称される。著に『柳河東集』四十五卷の書がある。伝は『旧唐書』卷一六〇、『新唐書』卷二六八など。

(6) 西山所選叙事議論：^{南宋}真徳秀『文章正宗』の叙事・議論の類。既出、本稿二六四頁注釈（一）参照。
(7) 蘇明允：^{北宋}蘇洵（一〇〇九〜一〇六六）、明允は字。四川眉山の人。蘇軾・蘇轍兄弟の父。詩文に優れる。著に『諡法』、『嘉祐集』などの書がある。伝は『宋史』卷四四三、『宋元学案』卷九九など。

(8) 湯東澗所選者：^{南宋}湯漢『妙絶古今』四卷。『春秋左氏伝』から蘇軾の文章に至るまで二十一家、七十九篇の名文を収めた書。

湯漢（一一二〇—一二七二）、字は伯紀、東澗は号。江西安仁の人。『文集』六十卷があつたが、今は伝わらない。伝は『宋史』卷四三八、『宋元学案』卷八四など。

〔通釈〕

作文を学ぶ。

文章を学ぶ方法について。韓愈の文章を読む方法は前述した通りである。既に篇法・章法・句法・字法の正しいあり方を理解したならば、以後は韓愈『韓昌黎文集』〔謝枋得『文章軌範』の批点があるもの〕を読み、また歐陽脩〔陳亮の選じた『歐陽文粹』が良い〕・曾鞏〔『元豊類稿』〕・王安石の三家の文体を選んで読む。こうして展開・結構の法を理解するのである。この三家の文章は、みな韓愈の文章を手本としており、明快・平易であるから、これらを学べば文体は純一となり、大家のような文章を数句作成することも望めるだろう。〔歐陽脩・曾鞏の文章は、韓愈のものと比べれば、より結構の変化ははっきりとしており運意は緻密、学びやすく検討に耐えるものである。けれども句法については、韓愈の古文には到底及ばない。朱熹は韓愈を学んだので、いっそう句法が優れている。真徳秀は理を明らかにすることを主としているが、句法には欠点もある。これらはよくよく知っておくべきことである。〕他にも、柳宗元の文章〔初めに真徳秀が『文章正宗』に選収した叙事体・議論体の文章を読み、それから『柳河東集』を読む〕や、蘇洵の文章などは、いずれも必ず読んでおかなければならない。それ以外の諸家の文章については、一緒に読んで読んではならない。韓愈の文章より学んでいき、少しずつ展開の法を求めていくようにする。これらを読むのは、ただ文体の優れたものを知るためである。理に欠点の

ある箇所が極めて多い場合は、理が明らかでないのに不幸にも文章だけが小器用に書けることへの戒めとすべきである。

もし叙事体の文章を雄壮・典雅にさせて、史官の任にあたらうとするならば、当然『史記』と『漢書』を学ばなくてはならない。まず真徳秀『文章正宗』、及び湯漢『妙絶古今』に選収された文章を読む。その後、司馬遷『史記』、班固『漢書』の全文を熟読する。これらは記録として世に広まっている文章であるから、必ず学ばなければならない。

学生が文章を学ぶには、まずは盛大に展開して、その後に簡略で理解し難いものへと収斂させていけば容易である。もしもいきなり簡略で理解し難い文章を学んで、その後に展開して大篇を作成しようとするならば困難なことになる。

若未忘場屋、欲學策、以我平日得於四書者爲本、更守平日所學文法、更略看漢唐策、陸宣公奏議、⁽¹⁾朱子封事書疏、宋名臣奏議、⁽²⁾范文正公、王臨川、蘇東坡萬言書、策略、策別等、學陳利害則得矣。況性理、治道、制度三者、已下工夫、亦不患於無以答所問矣。雖今日時務得失、亦須詳究。

欲學經問、直以大學中庸或問爲法。平日既讀四書註、及讀看性理文字、又不患於無本矣。

〔校異〕 異同なし。

〔注釈〕

(1) 陸宣公奏議…^{陸宣公}陸贄『陸宣公奏議』二十二卷。陸贄の奏草・奏議・制誥を収めた書。『陸宣公全集』とも称される。別に別集十五卷があったとされるが、今は佚して伝わらない。

陸贄(七五四〜八〇五)、字は敬輿、江蘇嘉興の人。暗愚といわれた徳宗(在位七七九〜八〇五)にたびたび諫言し、そのため讒言を被り左遷された。伝は『旧唐書』卷一三九、『新唐書』卷一五七など。

(2) 宋名臣奏議…^宋趙汝愚『皇朝名臣奏議』一百五十卷。

趙汝愚(一一四〇〜一一九六)、字は子直、江西余干の人。寧宗(在位一一九四〜一二二四)の即位後、朱熹等を召して登用したりしたが、後に韓侂胄が政權を握ると放逐、毒殺された。著に『太祖実録挙要』の書がある。伝は『宋史』卷三九二、『宋元学案』卷四六など。

(3) 范文正公王臨川蘇東坡…范仲淹・王安石・蘇軾を指す。王安石は既出、本稿二八四頁(4)参照。

范仲淹(九八九〜一〇五二)、字は希文、文正は諡。江蘇吳県の人。詩文に巧みで、その文章は謹嚴簡潔、議論文に長じていた。言行や治績は後世に多大な影響を与え、宋代の土風を代表する理想的人物として称揚された。著に『范文正公集』がある。伝は『宋史』卷三一四、『宋元学案』卷三など。

蘇軾(一〇三六〜一一〇一)、字は子瞻、東坡は号。四川眉山の人。豪放闊達な氣象で、詩・文・詞・書・画など多くの分野で圧倒的な成果を収めた。ただし程頤との関係は険悪で、政治的・学術的には道学と一線を画していた。著に『易伝』、『書伝』、『東坡志林』、『東坡全集』など多数の書がある。伝は『宋史』卷三三八、『宋元学案』卷九九など。

〔通釈〕

試験場でのことを考えて対策を学ぼうとするならば、自分が常日頃『四書』から学び得たところを根本とし、また常々学んでいる文法を守って、漢唐の対策、『陸宣公奏議』、朱子の封事書疏、『宋名臣奏議』、范仲淹・王安石・蘇軾の上奏文・策略・策別などに目を通して、利害を論じることを学べば得るところがある。ましてや性理・治道・制度の三者については既に修めているのであるから、問題として答えるに答えられないという心配はない。今日の時局・得失についても、詳しく推究しなければならぬ。

経問について学ぼうとするならば、『大学或問』・『中庸或問』を手本とする。常々『四書』の注や性理書の文章を読んでるので、根本がなくなるといふ心配はないであろう。

欲學經義、亦倣或問文體、用朱子貢舉私議(1)中作義法爲骨子。方今科制、明經以一家之說爲主、兼用古注疏、乃是用朱子貢舉私議之說。按貢舉私議云、令應舉人各占兩家以上、將來答義則以本說爲主、而旁通他說、以辨其是非、則治經者不敢妄牽己意、而必有据依矣。又云、使治經者必守家法、命題者必依章句、答義者必通貫經文、條舉衆說、而斷以己意。當更寫卷之式、明著問目之文、而疏其上下文、通約三十字以上。次列所治之說、而論其意。次又旁引他說、而以己意反覆辨析、以求至當之歸。但令直論聖賢本意、與其施用之實。不必如今日分段破題對偶敷衍之體、每道只限五六百字以上。至於舊例、經義禁引史傳、乃王氏末流之弊、皆當有以正之。此私議之說也。竊謂今之試中經義、既用張庭堅體(3)、亦不得不略倣之也。

致試者是亦不思之甚也。張庭堅體、已具冒原講證結、特未如宋末所謂文妖經賊之弊耳。致使累舉所取程文、未嘗有一篇能盡依今制、明舉所主所用所兼用之說者、此皆考官不能推明設科初意、預防末流輕淺虛衍之弊、致使舉學相承、以中爲式。今日鄉試經義、欲如初舉方希願禮記義者、不可得矣。科制明白不拘格律、蓋欲學者直寫胸中所學耳。奈何陰用冒原講證結格律、死守而不變、安得士務實學、得實材爲國家用、而爲科目增重哉。因著私論于此、以待能陳於上者取焉。

〔校異〕

a 義：四庫全書本、「意」に作る。 b 盡：叢書集成本、此の一字無し。 c 曰……叢書集成本・四庫全書本、「白」に作る。

〔注釈〕

(1) 朱子貢舉私議：『朱文公文集』卷六九に収める。また『分年日程』卷三（底本四十二丁）には、「朱子學校貢舉私議」として、その全文が引かれる。なお「學校貢舉私議」は、三浦國雄「學校と試験制度に関する私見」（『朱子（人類）的遺産一九』）講談社、一九七九年八月所収）に訳注がある。

(2) 方今科制：元代の科舉は延祐二年（一三一五）に初めて行なわれる。その考試程式は、蒙古式目人と漢人南人とで分かれる。蒙古式目人の場合は、第一場で経問五条、第二場で策。漢人南人の場合は、第一場で明経・経疑二問、第二場で古賦・詔誥章表のうち一道、第三場で策一道。

(3) 張庭堅：北宋張庭堅、字は才叔、四川広安の人。張庭堅の文章は、南宋呂祖謙『宋文鑑』卷一一・経義などに収められる。その文章は名高く、『経義模範』の巻頭に置かれるなどして、後世には経義の模範

とされていたようである。伝は『宋史』卷三四六、『宋元学案』卷一九など。

(4) 冒原講証結：文章の組み立ての一種。王惲（ちゆうこん）『玉堂嘉話』卷七に「作論法。鹿庵云、語と義体式、一般亦是冒原講証結」〔作論の法。鹿庵（元）王磐のこと、王惲の師〕云ふ、語と義との体式は、一般に亦た是れ冒・原・講・証・結なりと〕とある。

(5) 方希願礼記義：方希願「礼記義」。方希願については詳かでないが、『新刊類編歷挙三場文選』対策卷一では延祐元年（一三二四）の江浙郷試に方希願の名が見える。

〔通釈〕

經義を学ぼうとするならば、やはり或問の文体に倣い、朱子「学校貢挙私議」にある作義法を土台とする。昨今の科挙試験の明經では、一家の説を主として、古注疏を兼用する。これは、朱子「学校貢挙私議」の説を用いたものである。

調べてみるに、「学校貢挙私議」に次のようにある。

「科挙を受験する人は、それぞれ二家以上の説を修めて、将来、問題に答えるにあたっては本説を主としつつも、他説にも通じて、是非を弁別していく。そうすれば、經書を治めるにも妄りに私意を附会することなどなく、必ず依拠するところがあるだろう。」

「經を治める者には必ず家法を守らせ、出題者には必ず章句に依拠するようにさせ、問題に答える場合には必ず經文にくまなく通じ、多くの説を列挙した上で、自分の意見をもって判断させる。」

「解答の方式を改め、問目の文を明記させるべきである。その前後の文章、おおよそ三十文字以上を

列挙する。その次は自分が治めた経説を列ねて、その意を論じ、それから他説を併記して、自己の見解をもつて繰返し分析して、最も妥当な結論を求めると。ただ直截に聖賢の本意と実用性とを論じるようにさせ、必ずしも今日の分段・破題・対偶・敷衍のようにすることはない。一問ごとに五、六百字以上に限らせる。」

「旧例の経義において、史伝の引用を禁じているのは、王安石一派の末流による弊害であるから、改正すべきである。」

これらが「学校貢挙私議」の説である。

考えてみるに、今の科挙試験での経義が、張庭堅の文体を用いている以上、これがある程度は模倣しない訳にはいかない。ところがこのことについて、試験官にはひどく考えが足りないのである。張庭堅の文体は、冒頭・原題・講求・論証・帰結を具備するから、宋代末期のいわゆる「文妖経賊」のような弊害には至っていないというだけである。幾たびかの科挙で採用された答案には、今日の制度にきちんと依拠して主説・傍証・汎用の説を明確に示しているものが一篇たりともないという状態に至らせている。これはひとえに試験官が科挙を設けた当初の意図を推し量らず、末流の軽薄・空虚な弊害を防ぐことができず、幾度もの試験を重ねた中で及第した答案を手本としているからである。今日の郷試の経義では、科挙が始まったばかりの頃の方希願「礼記義」のようなものを求めても、得られはしない。

科挙の制度が、形式に拘泥するなど明言しているのは、学ぶ者にただ胸中に学んだことを書くようにさせたいからである。どうして暗に冒頭・原題・講求・論証・帰結の形式を用いて、これを死守して変

えようとはしないのか。こんなことでは、士大夫が実学に務め、実用的な人材を得て、国家の用となし得ようか。また科目が重きを増すこともないであろう。それゆえここに私論を記し、陛下に申し上げてくれる者が、採りあげてくれるのを待つのである。

如自朝廷議修學校教法、以輔賓興之制、則此弊息矣。假如書義倣張體、以蔡傳⁽¹⁾之說爲終篇主意〔如論破然〕。如傳辭已精緊、而括盡題意、則就用之爲起、或略而泛、則以其意自倣。次略衍開。次入題發明以結之。次原題、題下再提起前綱主意、歷提上下經文、而歸重此題。次反覆敷演。或正演、或反演、或正引事證、或反引事證、繳歸主意。次結。或入講腹⁽²⁾、提問逐節所主之說、所以釋此章之意〔如孔穎達疏文釋注之體〕、逐節發明其說、援引以證之、繳歸主意。後節如前、又總論以結之。如易、又旁通所主。次一家說、又發明其異者、而論斷之。又援引以證之、結之。次兼用注疏、論其得失而斷之、證之、結之。平日既熟讀經傳、又不患於無本矣。此亦姑言其大略耳。在作者自有活法、直寫平日所得經旨、無不可者。元設科條制、既云作義不拘格律、則自可依貢舉私議法、此則最妙。如不得已用張庭堅體、亦須守傳注疏論確實、不鑿不浮可也。

〔校異〕

- a 泛：叢書集成本、「汎」に作る。 b 原：底本、「官」に作る。叢書集成本・四庫全書本に従りて改める。
c 意：叢書集成本、「義」に作る。

〔注釈〕

(1) 蔡傳…漢末蔡沈『書集伝』六卷。既出、本誌第一六号一二四頁。

(2) 講腹…前述の「冒・原・講・証・結」の一。例えば元俞琰『書齋夜話』卷四には「冒頭・題下・講腹・結尾」、南宋項安世『項氏家説』附録卷一には「破題・原題・講腹・結尾」とある。

〔通釈〕

もしも朝廷から議論して学校の教法を修め、官吏採用の制度を輔翼したならば、このような弊害は止むである。

例えば経義で『尚書』を答える場合、張庭堅の文体を模倣しながら、蔡沈『書集伝』の説を全篇の主意とする「破題を論じようにする」、『書集伝』の文辞が精密であつて、出題の意図を十分に内包している場合には、それを用いて起文とする。逆に『書集伝』の文辞が簡略で表層的な場合には、題によって自分自身で書き起こしていく。それからおおむねその題を敷衍し展開してから、題そのものに入り、意を明確にして結ぶ。次は原題。題の下に前綱までの主意を再度提起して、前後の経文を全て提示し、この題に帰趨させる。それから繰り返し敷衍していく。正論で述べたり、反論で述べたり、あるいは正論として事証を引用したり、反論として事証を引用したりしながら、主意をまとめ帰結させて結ぶ。場合によっては、講腹に入り、節ごとに主説を提示・起問する。それは当該章の意を解釈するためである。「孔穎達の疏の釈文・注の文体のようにする。」節ごとに自説を明らかにし、引用をもって証拠とし、主意をまとめ帰結させる。後の節もこのようにしていき、最後に総論を著してこれらをまとめる。

『周易』については、主説をあまねく通じるようにする。それから一家の説で、異なる点について明らかにし得るものについてはこれを論断し、また引用をもって証拠として、これを結ぶ。それから注疏を兼用し、その得失を論じて断定し証拠として、これを結ぶ。常日頃から経伝を熟読していれば、根本がなくなるといふ心配はないだろうから、ここでは大略を述べるだけにしておく。執筆者にあつては、おのずから流儀があるだろうから、ただ日頃理解した経書の要旨を書くだけで間違はないだろう。

最初に科挙の科目の制度を設けた時に、「経義を著すことは格律に拘束されてはならない」と説いている以上、もとより「学校貢挙私議」の法に依拠すべきであり、これが最も優れた意見である。もしもやむを得ずに張庭堅の文体を用いる場合には、しっかりと伝注の議論を守って、無理に臆測したり軽薄な議論を展開をしたりしなければそれでよい。

欲學古賦、讀離騷、已見前。更看讀楚辭後語、並韓柳所作、句法韻度、則已得之。欲得著題命意、間架辭語縝密而有議論、爲科舉用、則當擇文選中漢魏諸賦七發及晉問熟看。大率近世文章視古漸弱、其運意則縝密於前。但於文選、文粹、文鑑觀之便見。⁽⁴⁾
欲學古體制誥、章表、讀文章正宗辭命類、及選看王臨川、曾南豐、蘇東坡、汪龍溪、周平園、宏辭總類等體。

四六章表、以王臨川、鄧潤父、曾南豐、蘇東坡、汪龍溪、周平園、陸放翁、劉後村及宏辭總類爲式。其

四六表體、今縱未能盡見諸家全集選鈔、亦須得舊本翰苑新書觀之、則見諸家之體、且并得其編定事料爲用。

〔校異〕異同なし。

〔注釈〕

(1) 楚辭後語：朱熹『楚辭後語』六卷。魏荀卿から北宋呂大臨までの文章五十二篇を選んで注釈した書。『楚辭集注』に附刻された。

(2) 七発：前漢枚乗の作。梁の孝王に仕えた時、東方朔「七諫」(『楚辭』所収)に倣って、太子に啓告するのために作った賦。『文選』卷八に収められる。

枚乗(？)前(一四〇)、字は叔、江蘇淮陰の人。前漢の景帝(在位前一五七)前(一四一)のとき、呉王の謀逆を諫めるもいれられず、梁の孝王の食客となる。伝は『漢書』卷五一。

(3) 晋問：唐柳宗元の作。唐呉武陵との問答の形態を取り、前漢枚乗「七発」に倣って全七部から構成された文。事役に疎い時の君主を風刺した文章とされる。

(4) 文選文粹文鑑：南朝梁蕭統しょうとう『文選』三十卷、北宋姚鉉ようげん『唐文粹』一百卷、南宋呂祖謙『宋文鑑』一百五十卷のこと。『文選』は、周から南朝梁までの約千年間、百数十人の詩・賦・文章約八百篇を所録した書。『唐文粹』は、唐代の名詩名文を、古賦・頌・賛など十六類に分類所録。『宋文鑑』は、宋代の名詩名文を、七十七門に分類所録。詩賦も有韻の文として収めている。

蕭統(五〇一)五三二)、字は德施、諡は昭明。梁の武帝(在位五〇二)五四九)の太子で、世に昭

明太子と称される。著に『古今詩苑英華』、『正序』、『昭明太子文集』などの書がある。伝は『梁書』卷八、『南史』卷五三。

姚鉉（九六八〜一〇二〇）、字は宝之、安徽合肥の人。伝は『宋史』卷四四一、『宋元学案補遺』卷三など。

(5) 汪龍溪：北宋汪藻（一〇七九〜一一五四）、字は彦章、龍溪は号。江西徳興の人。著に『浮溪集』、『靖康要録』の書がある。伝は『宋史』卷四四五など。

(6) 周平園：南宋周必大（一一二六〜一二〇四）、字は子允・洪道、平園は号。江西廬陵の人。右丞相・左丞相を歴任するも、弾劾や韓侂胄の党禁のために辞任した。著に『玉堂雜記』、『文忠集』などの書がある。

(7) 鄧潤父：北宋鄧潤甫（一一〇二〜一一〇九四）、字は温伯・聖求、江西南城の人。伝は『宋史』卷三四三、『宋元学案補遺』卷三など。

(8) 陸放翁：南宋陸游（一一二五〜一二〇九）、字は務観、放翁は号。浙江山陰の人。詩文をよくし、特にその詩は定評があり、一万首を越える作が遺る。著に『劍南詩稿』、『渭南文集』、『入蜀記』など多数の書がある。伝は『宋史』卷三九五、『宋元学案』卷九八など。

(9) 劉後村：南宋劉克莊（一一八七〜一二六九）、初名は灼、字は潜夫、後村は号。福建莆田の人。著に『後村集』、『後村詩話』の書がある。伝は『宋元学案』卷四七など。

(10) 翰苑新書：南宋『翰苑新書』前集十二卷・後集七卷・統集八卷・別集二卷。宋代の作であるが、撰者は

不詳。前集で書啓の用、後集で表牋の用、続集で宋代の書啓を録し、別集で宋人の筭状致語表文などを録した書。

〔通釈〕

古賦を学ぼうとする場合、「離騷」の読み方は前述の通りである。さらに『楚辞後語』や韓愈・柳宗元の作った賦を素読すれば、句法や風格は修得されるだろう。出題の命意、結構・語句が緻密であつて（見るべき）議論があり、科擧の用としようと願うならば、『文選』に収められた漢魏の諸賦や「七発」及び「晋問」を選んで熟読すべきである。おおむね、近頃の文章は、古に比べれば衰勢にあるが、その構想については前代よりも緻密になっている。これは『文選』、『唐文粹』、『宋文鑑』を読めば、たやすく分かるだろう。

制誥・章表の古体を学ぼうとするならば、『文章正宗』辞命類を読む。また王安石・曾鞏・蘇軾・汪龍溪・周平厥の宏辞・総類などの文体を選んで読む。

四六体・章表体については、王安石・鄧潤父・曾鞏・蘇軾・汪龍溪・周平園・陸游・劉克莊の宏辞・総類に及ぶものを手本とする。四六表体は、たとえ諸家の全集を見て選んで書き出すことができなくても、『翰苑新書』の旧本を手に入れて読んでおくべきである。そうすれば、諸家の体分かるし、編定・史料を理解して執筆の助けとなるであろう。